

病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

特に注意！（7月）②

ねぎ：ネギアザミウマ(えそ条斑病)



えそ条斑病の葉の病斑



ネギアザミウマ

特徴

- ◆ ネギアザミウマは葉を吸汁し、加害部は白く色が抜ける。
- ◆ えそ条斑病は、ネギアザミウマが媒介するウイルス病である。はじめ、葉身に紡錘型のえそ条斑を呈し、進行すると病斑が癒合拡大し、葉が萎凋・枯死することがある。

防除のポイント

- ◆ えそ条斑病に対する有効な薬剤はないので、媒介昆虫であるネギアザミウマの防除を徹底するとともに、感染株を見つけたらほ場外に持ち出し適切に処分する。
- ◆ えそ条斑病の病原ウイルス(IYSV)は一部の雑草にも感染するので、ほ場内や周囲の除草を徹底する。
- ◆ ネギアザミウマの発生を認めたら、プレオフロアブル、アグリメック、リーフガード顆粒水和剤等を散布する。なお、薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

野菜類・花き類：アブラムシ類



ワタアブラムシ※

特徴

- ◆ 作物を吸汁し、生育を阻害する。また排泄物にカビが発生し、すす病の原因となる。さらに、各種のウイルスを媒介し、作物によっては致命的な被害をもたらす。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、モスピラン顆粒水溶剤(なす、トマト、ミニトマト、しゅんぎくなど)、アドマイヤー顆粒水和剤(なす、トマト、ミニトマトなど)、コルト顆粒水和剤(なす、トマト、ミニトマト、花き類など)、ウララDF(なす、トマト、ミニトマト、ピーマンなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

6月～8月は農薬危害防止運動月間です。農薬は適正に使用し、事故・被害を防止しましょう！

次回の情報は7月下旬にお知らせします。

◎「防除指針」 https://www.pref.osaka.lg.jp/o120090/nosei/byogaicyu/boujo_shishin.html

農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

病害虫の発生予報(7月)

A 水稲

程度 品目	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
水稲			いもち病		
			縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)		
			斑点米カメムシ類		
発生に注意:ジャンボタニシ(スクミリンゴガイ)					

B 果樹

程度 品目	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
ぶどう			べと病		
			褐斑病		
			晩腐病		
			黒とう病		
			チャノキイロアザミウマ		
もも			せん孔細菌病		
			シンクイムシ類		
バラ科果樹	発生に注意:クビアカツヤカミキリ				
みかん			黒点病		
			ミカンハダニ		
			ミカンサビダニ		
いちじく			アザミウマ類		
果樹類全般					果樹 カメムシ類

C 野菜

程度 品目	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
なす			すすかび病		
			灰色かび病		
				うどんこ病	
			アザミウマ類		
ねぎ	発生に注意:さび病、ネギハモグリバエ、ネギアザミウマ(えそ条斑病)				

D 花き

程度 品目	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
きく			黒斑病・褐斑病		
			アザミウマ類		

E 野菜類・花き類

程度 品目	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
野菜類・花き類	発生に注意:サツマイモ基腐病				
			シロイチモジヨトウ		
			ハスモンヨトウ		
			オオタバコガ		
				アブラムシ類	
			コナジラミ類		

水稻

いもち病



葉いもち

特徴

- ◆ 低温多湿で日照不足の時に発生しやすく、降雨、窒素過多、過繁茂などの場合に助長される。

防除のポイント

- ◆ 常発ほ場でいもち病に登録のある箱施用剤を使用していない場合は、発生前にオリゼメート粒剤、コラトップ粒剤5、ゴウケツ粒剤、サンブラス粒剤等を散布する。
- ◆ 葉いもちの発生を認めたら治療効果のあるブラシンフロアブル等を散布する。

縞葉枯病(ヒメトビウンカ)



発生株



ヒメトビウンカ(成虫)

特徴

- ◆ 縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介される。
- ◆ リ病株では、新葉が垂れ下がって枯死する(ゆうれい症状)。

防除のポイント

- ◆ ヒメトビウンカが飛来しないように、周辺のイネ科雑草を除草する。
- ◆ 箱施用剤を使用していない場合や発生が多い場合は、本田防除剤スタークル(アルバリン)粒剤、アプロード水和剤、エクシードフロアブル等でヒメトビウンカの防除を徹底する。

斑点米カメムシ類



↑アカスジカスミカメ



アカヒゲホソ
ミドリカスミカメ→
(イネホソミドリカスミカメ)



←ホソハリカメムシ

特徴

- ◆ アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ(別名イネホソミドリカスミカメ)、ホソハリカメムシなどの発生が多い。
- ◆ イネが出穂すると畦畔や周辺のイネ科雑草から水田に飛来してくる。

防除のポイント

- ◆ 出穂10日前までにほ場周辺の畦畔や休耕田の除草を実施する。
- ◆ 出穂期～穂揃期にトレボン乳剤、スミチオン乳剤等を根元まで届くように散布する。発生が多い時は乳熟初期(出穂後10日頃)にも散布する。

イネカメムシに要注意！！



イネカメムシ

本府では現時点では顕著な被害は出ていないが、近年、関東から西日本の複数の都府県から斑点米カメムシの一種であるイネカメムシによる基部斑点米又は不稔米被害が報告されている。イネカメムシは水田飛び込み時期が他のカメムシより少し早めで、開花直後から穂の吸汁加害を始めるので出穂直後の防除が必要となる。予察情報等に注意して発生が見込まれるときは防除時期を逸さないように注意する。

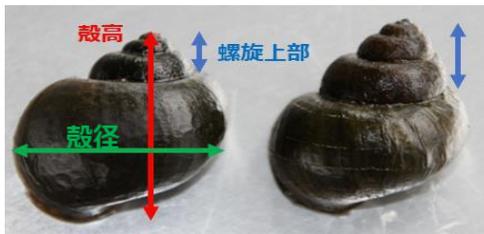
原図：農林水産省植物防疫所病害虫情報 第127号

水稲

ジャンボタニシ(スクミリングガイ)



ジャンボタニシ
(スクミリングガイ)



ジャンボタニシ

マルタニシ



ヒメタニシ

注)当該項目「ジャンボタニシ(スクミリングガイ)」の写真は、農林水産省リーフレット「ジャンボタニシによる水稲の被害を防ぐために」より引用。

特徴

- ◆ 成員の殻高は2～7cm程度。
- ◆ 他のタニシ類に比較して、螺旋上部の長さが短く、殻径と殻高がほぼ同じである(上部写真参考)。
- ◆ 主に田植え直後(約20日後まで)の苗が食害され、欠株になる。

防除のポイント

- ◆ ピンク色の卵塊を発見した場合は、水中に掻き落とす。ただし、ふ化直前の黒～白っぽくなった卵塊は水中でもふ化可能であり、水中に落とすと逆効果になるため、踏みつぶして処理する。
 - ◆ 水深4cm以下では自由に移動できないので、田植え後の浅水管理が有効。
 - ◆ ほ場が凸凹の場合、深いところの稲が食害されるため、代かきをきちんと行い、ほ場を平らにする。
 - ◆ 用水路からの侵入を防ぐため、取水口や排水口に金網(9mm目合い程度)を設置する。
 - ◆ 田植え直後にスクミノン、スクミンバイト3、ジャンボたにしくん等を散布する。
- 注)スクミノン、ジャンボたにしくんを使用後は7日間湛水状態にし、かけ流しや落水はしない。



卵塊

農林水産省・安全局植物防疫課令和5年「スクミリングガイ防除対策マニュアル(移植栽培)」はこちら
https://www.maff.go.jp/j/syoutan/syokubo/gaicyu/siryoutu2/sukumi/PDF/sukumi_manual.pdf

ぶどう

べと病



葉裏の症状

※注意！

一部の農薬は、果粉溶脱を生じるおそれがあるので、幼果期から果粒肥大期の散布を避けて袋かけ以降に使用し、無袋栽培(傘掛けを含む)には使用しない等の注意事項が掲載されていますので、よく確認してください。

特徴

- ◆ 梅雨時期など、雨が続くとまん延しやすい。

防除のポイント

- ◆ 露地の多発ほ場では梅雨の晴れ間の予防が重要である。
- ◆ 発生を認めたらリドミルゴールドMZ、アリエッティ水和剤、ベトファイター顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 農薬を散布する際に、薬害や果実の汚れを避けるため、傘・袋かけ後は棚上散布を行う。

ぶどう

褐斑病

※注意！

一部の農薬は、果粉溶脱を生じるおそれがあるので、幼果期から果粒肥大期の散布を避けて袋かけ以降に使用し、無袋栽培(傘掛けを含む)には使用しない等の注意事項が掲載されていますので、よく確認してください。



被害葉



被害葉(拡大)*

特徴

- ◆ 米国系品種に弱い品種が多く、デラウェア、バッファローなどに発生が多い。
- ◆ 多発すると、葉が早期落葉し、果実の着色が不良となる。

防除のポイント

- ◆ 被害葉は取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 発生を認めたら、オンリーワンフロアブル、ネクスターフロアブル、フルーツセイバー等を散布する。

晩腐病



被害果※

特徴

- ◆ 新梢伸長期～収穫期に雨が多いと多発しやすい。
- ◆ デラウェアに発生が多く、病原菌は結果母枝、巻きつるなどで越冬する。

防除のポイント

- ◆ 施設内への雨滴の侵入を防ぐ。
- ◆ 笠かけや袋かけを行う。
- ◆ 被害果房は取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 前年度の発生状況をふまえ、フルーツセイバー、ファンタジスタ顆粒水和剤、セイビアーフロアブル20等を予防的に散布する。

黒とう病



被害果



被害果(拡大)

特徴

- ◆ 葉、果実、新梢、巻きヒゲに発病し、大粒系に発生が多い。
- ◆ 枝や果実に黒色の病斑が生じ、果実肥大の不良など品質低下につながる。

防除のポイント

- ◆ 雨よけすることで被害が軽減できる。
- ◆ 被害果房や枝は取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 5月中旬以降は園芸ボルドー、ストロビードライフロアブル、オンリーワンフロアブル等を予防的に散布する。

ぶどう

チャノキイロアザミウマ

※注意！

一部の農薬は、果粉溶脱を生じるおそれがあるので、幼果期から果粒肥大期の散布を避けて袋かけ以降に使用し、無袋栽培(傘掛けを含む)には使用しない等の注意事項が掲載されていますので、よく確認してください。



被害果*

特徴

- ◆ 巨峰、シャインマスカット等の大粒系品種で被害が大きくなりやすい。

防除のポイント

- ◆ ディアナWDG、エクシレルSE、テツパン液剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

もも

せん孔細菌病



葉の病斑

特徴

- ◆ 春になると越冬した病原菌が増殖し春型枝病斑(前年枝の表面が黒褐色で、陥没したり、裂けたり、かさぶた状になる)を生じる。
- ◆ 病原細菌は、雨水に混じって分散し、気孔や傷口から感染する。

防除のポイント

- ◆ 開花後、枝に形成された病斑を見つけた場合は、早急に健全部を含めて大きめに取り除き、園外で適切に処分する。
- ◆ 発生を認めたら、バリダシン液剤5、スターナ水和剤等を散布する。
- ◆ 風当たりの強いほ場では防風ネットを設置する。

シンクイムシ類



被害果

特徴

- ◆ ももの果実に食入するシンクイムシ類は、ナシヒメシンクイ、モモシンクイガ、モモノゴマダラノメイガがある。

防除のポイント

- ◆ 被害枝は除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 産卵期から幼虫加害期(5月上旬～7月下旬)にノーモルト乳剤、アディオン乳剤、サムコルフロアブル10、ディアナWDG等を散布する。

バラ科果樹(もも、すもも、うめ等のサクラ属)

クビアカツヤカミキリ



フラス



幼虫

株元に溜まったフラス

特徴

- ◆ 成虫は体長2～4cm。前胸部は明赤色で、全体は光沢ある黒色。成虫は6～8月頃に出現する。
- ◆ 幼虫は樹木内部を食い荒らし、枯死させる。3月下旬から中華麺～うどん状のフラス(木くず等の混合物)を出す。
- ◆ フラスが出ている穴の周辺に幼虫がいる可能性が高い。
- ◆ 若齢幼虫はうどんよりも細い(中華麺状)フラスを出すことがあり、この時期の防除が効果的である。

防除のポイント

- ◆ フラスを見つけたら、千枚通しや針金等を穴に入れ、中のフラスをかき出してからロビンフッド、ベニカカミキリムシエアゾールを注入するか、幼虫を突き刺して殺虫する。
- ◆ 発生地域では、6月中旬から8月に、成虫対象の登録農薬(モスピラン顆粒水溶剤、テツパン液剤等)を散布する。
- ◆ ネットを設置した場合は、ネット内での交尾・産卵を防ぐため、定期的にネット内を確認し、成虫を見つけしだいハンマーなどで捕殺する。



成虫

「クビアカツヤカミキリの生態と防除対策(R6.3改訂版)」
についてもご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/kubiaka_osaka.pdf

みかん

黒点病



被害果

特徴

- ◆ 梅雨時期など雨が続くと発生が増加する。

防除のポイント

- ◆ 発生が見込まれる時期にジマンダイセン(ペンコゼブ)水和剤、ストロビードライフロアブル(かんきつ)、ナティーボフロアブル(かんきつ)等を散布する。降雨が多い場合には、散布回数を増やす。
- ◆ ジマンダイセン(ペンコゼブ)水和剤を使用する場合は、皮膚のかぶれに注意する。

みかん

ミカンハダニ



被害葉

特徴

- ◆ 梅雨明け後に発生が多くなる。

防除のポイント

- ◆ 6月中～下旬に、ハーベストオイル(かんきつ)、スプレーオイル(かんきつ)、アタックオイル(かんきつ)等のマシン油剤を散布する。
- ◆ 発生を認めたら、ダニコングフロアブル(かんきつ)、スターマイトプラスフロアブル(かんきつ)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。
- ◆ 薬剤を散布する場合は、葉裏にも薬液がかかるように散布する。

ミカンサビダニ



被害果*

特徴

- ◆ 梅雨明け後に発生が多くなりやすい。

防除のポイント

- ◆ 発生の初期に、ジマンダイセン(ペンコゼブ)水和剤、エムダイファー水和剤等を散布する。
※注意！
かんきつ(みかんを除く)では、上記2剤とも使用時期が「収穫90日前まで」なので使用時期に注意する。また、皮膚のかぶれに注意する。
- ◆ ジマンダイセン(ペンコゼブ)水和剤、エムダイファー水和剤に対して薬剤抵抗性が生じている地域では、7月中旬にコテツフロアブル(かんきつ)、ダニカット乳剤20、ダニエモンフロアブル(かんきつ)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

いちじく

アザミウマ類



被害果

特徴

- ◆ 果実の横径が2.5～3.0cmの頃から2週間程度の間に入侵入する。
- ◆ 果実内に侵入し食害する。食害された果実は内部が変色する。

防除のポイント

- ◆ スピノエース顆粒水和剤、ディアナWDG、アディオン乳剤等を散布する。
- ◆ ほ場の周囲を0.8mm目合いの赤色ネットで覆い、成虫の侵入を抑える。
- ◆ 乱反射型光拡散シートをマルチとして設置し、成虫の侵入を抑える。

野菜

なす

すすかび病



葉の病斑

特徴

- ◆ 高温多湿になる施設栽培で発生が多い。

防除のポイント

- ◆ 適度に換気を行い、湿度を下げる。
- ◆ 発生が見込まれる時期にバルコート水和剤、ダコニール1000等を、発生を認めたらスコア顆粒水和剤、プロポーズ顆粒水和剤、ストロビーフロアブル等を散布する。

灰色かび病



被害果

特徴

- ◆ 咲き終わった花弁や幼果に感染しやすく、20℃程度の多湿な環境条件や過繁茂で発生が多くなる。

防除のポイント

- ◆ 適度に換気を行い、湿度を下げる。
- ◆ 発生が見込まれる時期に、ボトキラー水和剤、バルコート水和剤等を、発生を認めたら、セイビアーフロアブル20、ゲッター水和剤、ファンタジスタ顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 開花後の花弁を取り除く。
- ◆ 同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

アザミウマ類



ミカンキイロアザミウマ成虫※



被害果

特徴

- ◆ ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマが果実や葉を加害する。なお、ミカンキイロアザミウマの果実被害は、「水なす」で目立つ。

防除のポイント

- ◆ 苗からの持ち込みによる発生に注意する。
- ◆ 育苗期後半～定植当日にスタークル(アルバリン)粒剤、アベイル粒剤等を施用する。
- ◆ 発生が見られたら、モベントフロアブル、ファインセーブフロアブル、スピノエース顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ◆ 雑草はアザミウマ類の生息場所となるため、ほ場内および周辺の除草を徹底する。

※原図：(地独)大阪府立環境農林水産総合研究所
*原図：大阪府園芸植物病害虫図鑑(大阪府植物防疫協会)
無断転載を禁ずる。

野菜

ねぎ

さび病



葉の病斑

特徴

- ◆ 葉面にオレンジ色のやや隆起した小斑点が多数できる。
- ◆ 多発すると被害葉が枯死する。
- ◆ 気温が22℃ぐらいで雨の多いときに発生が多い。
- ◆ 肥料切れした畑で発生が多い。

防除のポイント

- ◆ 菌は被害植物上で越冬するので、被害株を集めて、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 発生前から、アミスター20フロアブル、ラリー水和剤、パレード20フロアブル等を予防的に散布する。

ネギハモグリバエ



葉の食害痕

特徴

- ◆ 葉の内部を幼虫が食い進み、その痕が細長く白い筋になる。
- ◆ 新系統が発見されており、従来に比べて一葉あたりの幼虫数が多く、集中的に葉肉を食害するため、葉が白化したようになる。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、ハモグリバエの系統に関わらず、「ハモグリバエ類」、「ネギハモグリバエ」に適用のある農薬を散布する。
- ◆ グレース乳剤、アフーム乳剤等により、発生初期の防除を徹底する。



▲新系統について詳しくはこちら

花き(きく)

黒斑病・褐斑病



病斑*

特徴

- ◆ 雨滴によって感染が拡大する。
- ◆ 病原菌の生育適温は24～28℃ぐらいである。

防除のポイント

- ◆ 被害葉は取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。
- ◆ ダコニール1000等を散布し、予防に努める。
- ◆ 発生を認めたら、ベンレート水和剤、トップジンM水和剤(登録は褐斑病のみ)、ストロビーフロアブル等を散布する。

注)ダコニール1000は、花卉に薬液が付着すると漂白・退色などによる斑点を生じる場合があるので着色期以降の散布はさける。また、かぶれに注意する。
ストロビーフロアブルは高温多湿下では、薬害の恐れがあるので使用しない。また、他剤との混用は薬害が生じる恐れがあるので注意する。

花き(きく)

アザミウマ類



ミカンキイロアザミウマ成虫※

特徴

- ◆ 品種により被害の現れ方に差がある。
- ◆ 花弁にはミカンキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマなどが加害し、葉には主にクロゲハナアザミウマなどが加害する。
- ◆ ミカンキイロアザミウマはウイルス(TSWV※1、CSNV※2)を媒介する。
※1 キクえそ病の病原ウイルス ※2 キク茎えそ病の病原ウイルス

防除のポイント

- ◆ ほ場内および周辺の除草を行う。
- ◆ きくの残さは放置せず、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ ビニールなどのマルチングにより、土中での蛹化を防ぐ。
- ◆ 施設開口部に防虫ネットを展張する。
- ◆ 発生を認めたら、ディアナSC(花き類・観葉植物(除りんどう))、アフーム乳剤、モスピラン顆粒水溶剤(花き類・観葉植物(除ストック、りんどう))などを散布する。

野菜類・花き類

サツマイモ基腐病



被害株の葉の変色

特徴

- ◆ かび(糸状菌)の一種が原因で、かんしょ(さつまいも)で発生する。
- ◆ 葉が黄変・萎凋したり、茎の基部が暗褐色～黒色に変色する。
- ◆ 進行すると茎葉の枯死、いもの腐敗が発生する。

防除のポイント

- ◆ 排水不良により発生しやすいので、ほ場の排水対策を徹底する。
- ◆ ほ場を定期的に見回り、発生株の早期発見に努める。
- ◆ 発生株は早めに除去し、ほ場外に持ち出して適切に処分する。



▲詳しくはこちら

シロイチモジヨトウ



幼虫

特徴

- ◆ ねぎでの発生が多いが、しゅんぎく、まめ類、なす科野菜、あぶらな科野菜、花き類等多くの作物を加害する。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、プレオフロアブル(ねぎなど)、グレーシア乳剤(ねぎなど)、コテツフロアブル(ねぎなど)、ベネビアOD(ねぎなど)、ロムダンフロアブル(ねぎ、花き類・観葉植物、きく)等を散布する。

野菜類・花き類

ハスモンヨトウ



幼虫

特徴

- ◆ なす科野菜、さといも等多くの作物を加害する。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、アディオソ乳剤(さといも、さといも(葉柄)、オクラ、豆類(未成熟)など)、ディアナSC(かぼちゃ、なす、トマト、ミニトマトなど)、コテツフロアブル(さといも(葉柄)、さといも、オクラ、花き類など)、プレバソソフロアブル5(さといも、なす、ピーマンなど)等を散布する。

ヨトウムシ類については「ヨトウムシ類の見分け方」をご参照ください。
https://www.jppn.ne.jp/osaka/color/yoto/yoto_l.pdf

オオタバコガ



幼虫

特徴

- ◆ 果実や茎などに食入する。食害痕のまわりに虫のフンが確認されることが多い。

防除のポイント

- ◆ 果実の食入孔の中にいるため薬剤がかかりにくく、さらに老齢幼虫には薬剤の効果が落ちるため、捕殺等も含めて早めに対応を行う。
- ◆ 発生を認めたら、プレバソソフロアブル5(なす、トマト、ミニトマトなど)、ディアナSC(なす、トマト、ミニトマトなど)、プレオフロアブル(なす、トマト、ミニトマト、花き類・観葉植物など)等を散布する。

令和6年5月24日発出の病害虫発生予察注意報第2号「オオタバコガ」
 についてもご参照ください。

[https://www.jppn.ne.jp/osaka/R6th/chuuihou/2405_chuuihou02\(ootabakoga\)_soshin.pdf](https://www.jppn.ne.jp/osaka/R6th/chuuihou/2405_chuuihou02(ootabakoga)_soshin.pdf)



卵

コナジラミ類



タバココナジラミ※

特徴

- ◆ すず病の原因となる。タバココナジラミは、トマトでは吸汁による果実の着色不良、TYLCV(トマト黄化葉巻ウイルス)の伝搬、きゅうりではCCYV(ウリ類退緑黄化ウイルス)の伝搬等、様々な被害を引き起こす。

防除のポイント

- ◆ トマト黄化葉巻病、キュウリ退緑黄化病などのウイルス病は、感染すると株ごと除去する以外に対策がないため、媒介するタバココナジラミの防除を徹底する。
- ◆ 施設開口部に目合い0.4mmのネットを展張する。
- ◆ ほ場内及び周辺の除草を徹底する。
- ◆ ベネビアOD(トマト、きゅうりなど)、コルト顆粒水和剤(なす、トマト、きゅうりなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。